

南部こけしの世界 (上)



橋本 正明
Feb.21, 2015

キナキナ習俗圏



この圏内で木地を挽いた工人は、その木地系統の如何に拘わらずキナキナを製作した。この圏内には、キナキナを必要とする習俗があった。

キナキナの方言分布

- きなきなずんぞこ 一ノ関
- くなくなこげす・きくきく坊 膽澤
- きっからぼっこ 花巻
- きなきな坊 上閉伊
- きなきなぼっこ・きなきなおぼこ 盛岡
- きくらぼっこ 鉛
- かつくら棒 角館・檜木内
- かつくらぼんぼ 雄勝郡大館

こけし辞典、こけしの郷愁・10、こけし襍記

柳田国男が思い描いたこけしの発生

おしらさま



かぎぼとけ
べろべろの神



おしゃぶり
キナキナ



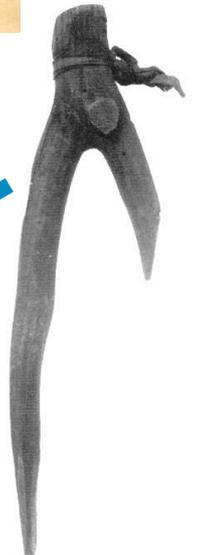
こけし



おしゃぶり



おしらさま



アイヌの鉤型人形



キナキナ

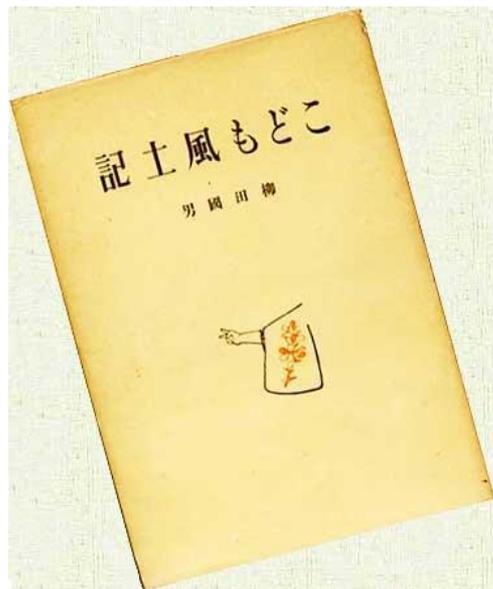


こけし

キナキナの発生までは説得力がある

「人形が今のように写実になったのは、わが国でもそう古いことではない。東北で盲の巫女が舞わせているオシラサマという木の神は、ある土地では布でおおうた単なる棒であり、また他の土地では、その木の頭に目鼻口だけ描いてある。そうしてこれをカギボトケという名などもまだ時々記憶せられている。信心な人たちの強いまぼろしでは単なる鉤のある小枝でも、なおありがたい神の姿に見ることができたので、それを祭りする人の口の前に持ってくるのが大切な条件ではなかったかと思う。東京でオシャブリ、関西でネブリコなどという木の人形も、これを轆轤でひいて今のコケシボコにするまでの、もとの形というものがあって、それが後には若い者の手によって管理せられることになったのではあるまいか。」

柳田国男〈こども風土記〉



西田峯吉は〈こけし風土記〉でこの柳田国男の一文を紹介し、「こけしの起源」を説明するものの一つ、「おしゃぶり転化説」として取り上げた。

「鉤形の棒や紙縶（こより）の先を曲げたものをベロベロノカミとかベロベロノカギとか呼ぶ地方は、東北は一帯、関東中部地方から近畿にまでおよんでいる。ベロベロの名の起りは念ずるときにこの鉤を口のはたにつけて廻すという作法があったためかと思われる。京都では酒席の戯れに紙縶を箸の握りにくくりつけて針の形とし、両掌の間でもむ。「へ口へ口の神様は正直な神様で／お酒の方へとおもふきやれ」ととなえ、その方角の人が罰盃を受ける。青森県三戸郡五戸では童戯になっているが、岩手県ではもオシラサマを両手で揉み、「ベロベロのかぎは尊いかぎで云々」ととなえ、その年の吉凶をトする。新潟県刈羽郡では屁の詮議の時のみに使う。となえごとは「ベロベロカメロ／トメノカメロ／親でも子でも／屁こいた方へちゃんと向け」、奥南部では「ベロベロカギコ／尊いかギコ」ととなえている」[（歴博：民俗語彙データベース）](#)

私の祖父の代には、どこの家でもおもちゃ箱にはだいたいベロベロノカギコが入っていて、よく遊んだそうだ。真ん中に一人の子が入って、カギコの鉤を口の前におきながらクルクル回転させて、「ベロベロ、ベロベロ、ベロベロのカギはトウダイカギで、親でも子でも屁ひった方にくるりと向けよ」と唱えて屁の犯人を当てる遊びだそうだ。「トウダイカギで」というのは「尊い鉤で」という意味だろう。[（木人子室）](#)

穎原退藏著

川柳雑俳用語考

附 西鶴用語考

岩波書店刊行

〇べろくの神

(三味線草
昭二ノ七)

出雲へ御供べろくの神 (俳諧鶴、十九)

階子屁てけふへろくの神送り (同、廿七)

へろくの神すかし屁に呼出され (同、廿七)

べろくの神の様なるさしを投 百河(柳多留、六十六)

べろくの神すかし屁のぬしをさし 集馬(同、百)

大勢の中でひそかに放屁した者があつた場合、紙捻の先端を折り曲げたのを兩掌の間に挟み持ち、「べろくの神は正直神よ」などと言ひながら揉み廻し、その言葉が終つた時、折り曲げた先端の向いて居る方の人を放屁者と當てる。右に掲げた例の第一は

大社屁ひりの神は末座なり 万仁(柳多留、四十四)

と同工で、神様の中でも格式の最も低いものだらうとの滑稽である。

木の股になつた棒や、先を曲げた紙縒を、口の前で廻して占う一種の神降ろしの習俗は、近世日本にかなり普遍的にあつた。オシラサマやシンメイサマもその一つ。べろべろの神は、それが童戯(子供の遊び)や酒席の遊戯になつたものだが、東北の青森・岩手ではその童戯が明治末から大正まで残っていた。木地製品のおしやぶりは両端に舐めるための頭が付いているのが普通であつたが、このべろべろの神の習俗と融合して人形化し、キナキナ坊になつた。やがてこけし化していく。こけしにも必ずもとの形というものがある。(柳田国男の考えたこと)

南部の木地師

御領分物産取調書(享保年間)：盛岡市中央公民館蔵

○ 二子万丁目通

- 木地るい：湯口、志戸平の二村より出る 塗物るい右同断

○ 雫石通

- 御器： 雫石町より出る

○ 大迫通

- 漆： 内川目村

○ 福岡通

- 蠟： 惣村より出、御役生蠟五十貫目ほど上納
- 漆： 惣村より出、御役水漆同断
- 蠟燭： 福岡、一戸町
- 御器るい： 荒屋、中佐井、大清水の三村より出

○ 花輪通

- 椀、木地るい： 田山村

「通」とは何か？

南部藩の行政区画で代官の統治区域を「通（とおり）」と称していた。代官区は左の三十三区であった

岩手郡 上田通、厨川通、**雫石通**、向中野通、沼宮内通

志和郡 飯岡通、長岡通、日詰通、見前通、徳田通、伝法寺通

稗貫郡 大迫通、八幡通、寺林通、高木通、**万丁目通**

和賀郡 沢内通、黒沢尻通、鬼柳通、安俵通、**二子通**

閉伊郡 大槌通、宮古通、遠野通

九戸郡 野田通

二戸郡 **福岡通**

三戸郡 三戸通、五戸通

鹿角郡 **花輪通**、毛馬内通

北郡 七戸通、野辺地、田名部通

□ …木地屋がいた「通」

右のうち、一つの代官所で、二通を兼ねて所管したものがあり、代官所の数は二十五であった。例えば、二子と万丁目は一つの代官所で、二子万丁目通と呼ばれることもあった。

御領分物産取調書
享保年間の南部領内木地師



キナキナ制作にかかわる南部地方の木地師のグループ

① 安保一家とその弟子筋

元禄年間に美濃より秋田県鹿角郡安保へ移動して木地業を営み、後に浄法寺の荒屋地区に移った。

享保年間に南部藩より二人扶持を与えられてお抱え木地師となり、盛岡に移住した。

② 志戸平の佐々木一家

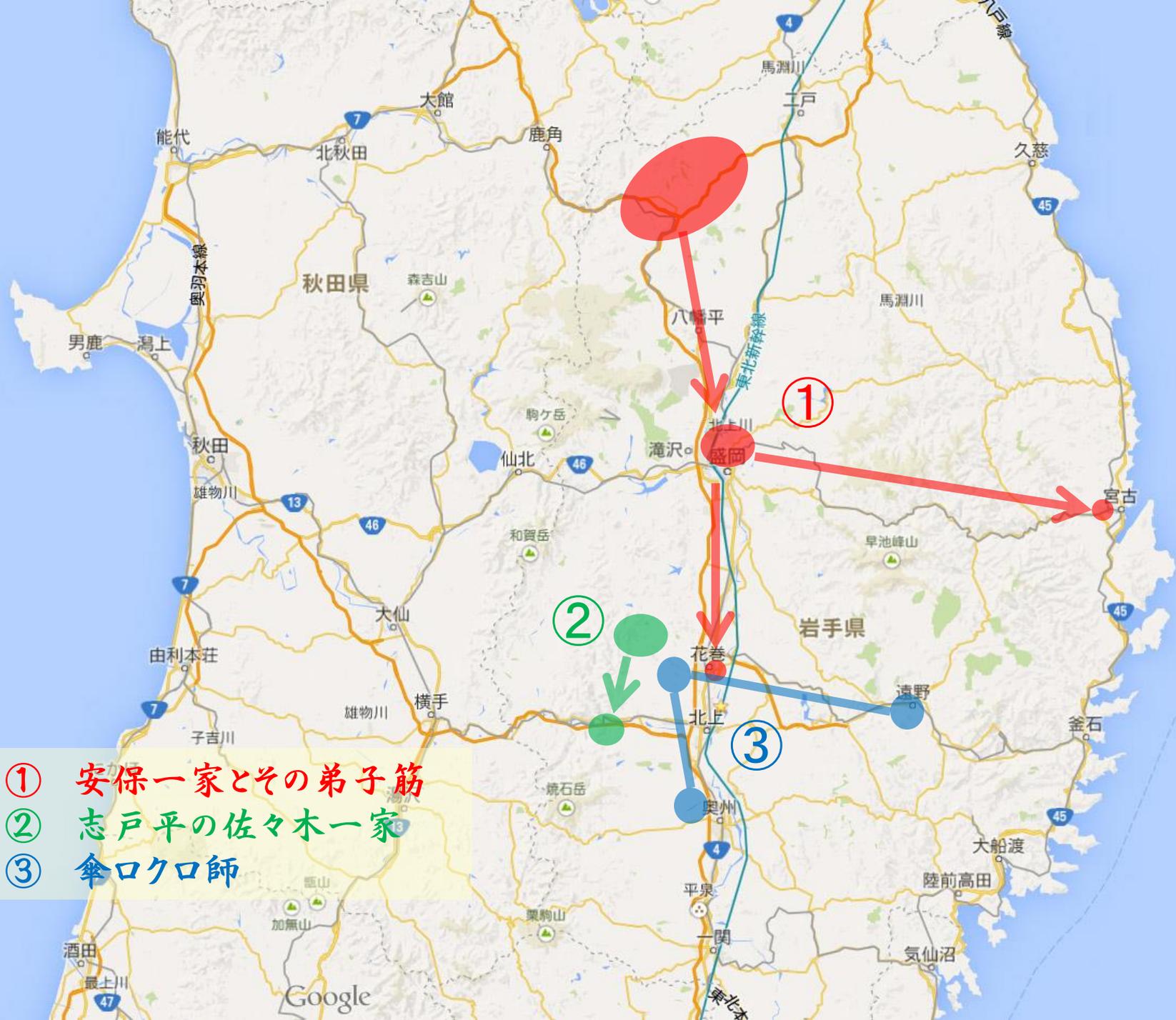
佐々木家は代々花巻城の家老職を務めていたが、南部利直候(1576～1632)が慶長18年に花巻城に入城したあと意見が対立して二子城へまわされた。これを快しとせず、城を去って志戸平に移った。その初代覚平より志戸平で木地を始めた。

③ 傘口ク口師

花巻は京都、岐阜、金沢などの並んで、江戸末期から明治にかけて和傘の産地として知られた。傘の口ク口を挽く工人も多くいた。

④ 他産地からの影響や県の産業振興政策によるこけし

- a. 鳴子から来たこけし工人とその影響
- b. 青根で学んだ照井音治
- c. 工業試験場の技師の図案
- d. 業者によるこけし



- ① 安保一家とその弟子筋
- ② 志戸平の佐々木一家
- ③ 傘口ク口師

キナキナ制作にかかわる南部地方の木地師のグループ

① 安保一家とその弟子筋

元禄年間に美濃より秋田県鹿角郡安保へ移動して木地業を営み、後に浄法寺の荒屋地区に移った。

享保年間に南部藩より二人扶持を与えられてお抱え木地師となり、盛岡に移住した。

② 志戸平の佐々木一家

佐々木家は代々花巻城の家老職を務めていたが、南部利直候(1576~1632)が慶長18年に花巻城に入城したあと意見が対立して二子城へまわされた。これを快しとせず、城を去って志戸平に移った。その初代覚平より志戸平で木地を始めた。

③ 傘口ク口師

花巻は京都、岐阜、金沢などの並んで、江戸末期から明治にかけて和傘の産地として知られた。傘の口ク口を挽く工人も多くいた。

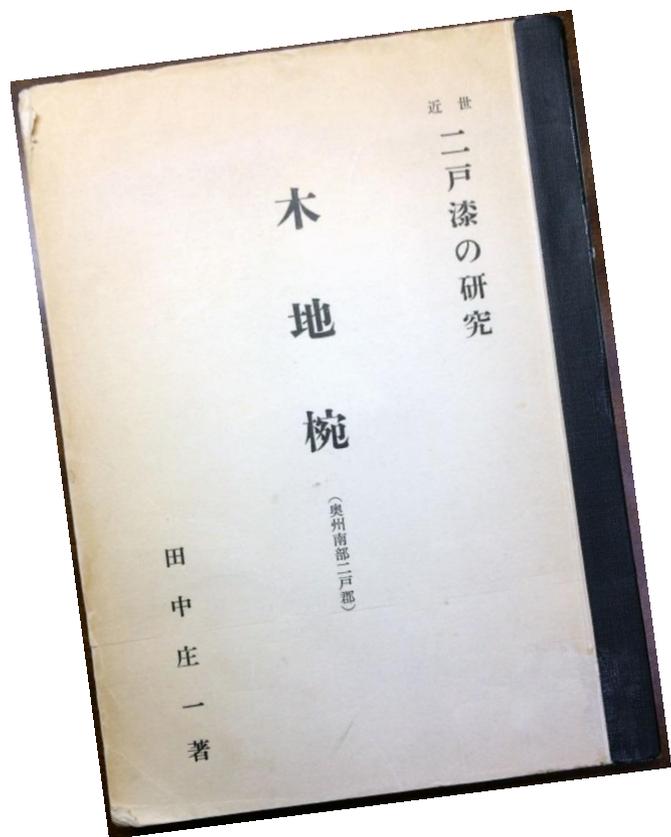
④ 他産地からの影響や県の産業振興政策によるこけし

- a. 鳴子から来たこけし工人とその影響
- b. 青根で学んだ照井音治
- c. 工業試験場の技師の図案
- d. 業者によるこけし

福岡通の木地業 浄法寺塗・浄法寺椀

浄法寺は、武家畠山重慶が鎌倉の浄法寺で出家した後、還俗して奥州に下り、この地に住み着いて浄法寺氏を名乗ったことによる地名。

浄法寺塗は、この地の天台寺の僧侶の手で自家用什器が作られたことに始まるとされる。それが、浄法寺町の市日で売られたことから、浄法寺塗と云われるようになった。藩制時代には南部藩の重要な産物として天台寺周辺から安比川の上流まで産地を拡大し、「御山御器」の名前で知られていた。



天台寺本尊聖観音菩薩



いま、東京国立美術館
特別展「みちのくの仏像」に
来ています。

天台寺

奈良時代神亀5年(728年)に行基菩薩が聖武天皇の命を受けて、八葉山と命名し、山中の桂の大木を刻んで本尊聖観音菩薩とし、天皇直筆の額を掲げて開山したものである。草創の正確な時期は不明であるが、寺に伝わる仏像の制作年代から、平安時代には寺観が整っていたと思われる。



桂泉(かつらしみず)

巨大な桂の木の根元から清水が湧き出ている。奈良時代から滾々と湧き出ている神聖な場所。この桂の木の樹齢は1000年といわれている。

安保一家の移動経路



平安時代末期
(1170年代)
に始まる

浄法寺

浅沢(中佐井)

荒屋

赤坂田

盛岡

元禄年間

享保年間

美濃より

安保氏は鹿角四頭の一つで、もともと武蔵国賀美郡阿保郷を本貫としていたが、鎌倉時代に鹿角に入り地頭職になった。その所領の花輪付近を安保と言った。

その安保に居たため美濃から来た木地師一家も安保を名乗った。

安保

彌一郎 — 彌市 — 彌助

彌七 — 彌吉 — 彌市郎

安保惣四郎 — 力ネ

二戸郡田山

彌次郎

クニ

小原

勘蔵

ナヲ

一郎

勘太郎

ヒサ

和助

清次郎

精一

弘次

セン

徳太郎

正一

仁兵衛

和七

松田 (常陸屋)

作ったキナキナが確認されている工人

血縁系図

鎌田千代松

煤孫

茂吉

実太郎 | 盛造

彌次郎

一郎

清次郎

徳太郎 | 精一

正一 | 弘次

松田

寺沢政吉

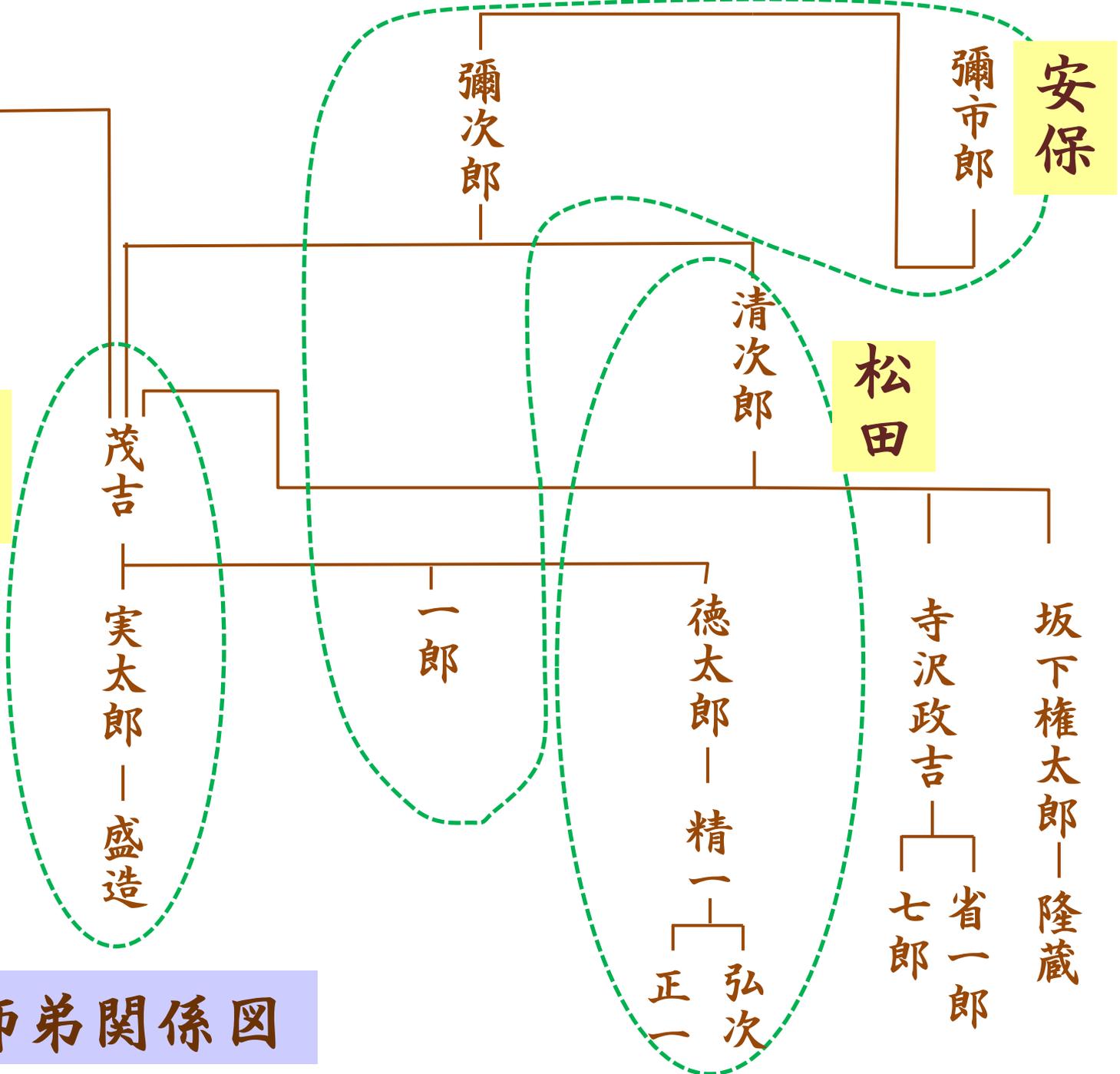
七郎 | 省一郎

彌市郎

安保

坂下権太郎 | 隆蔵

木地師弟関係図

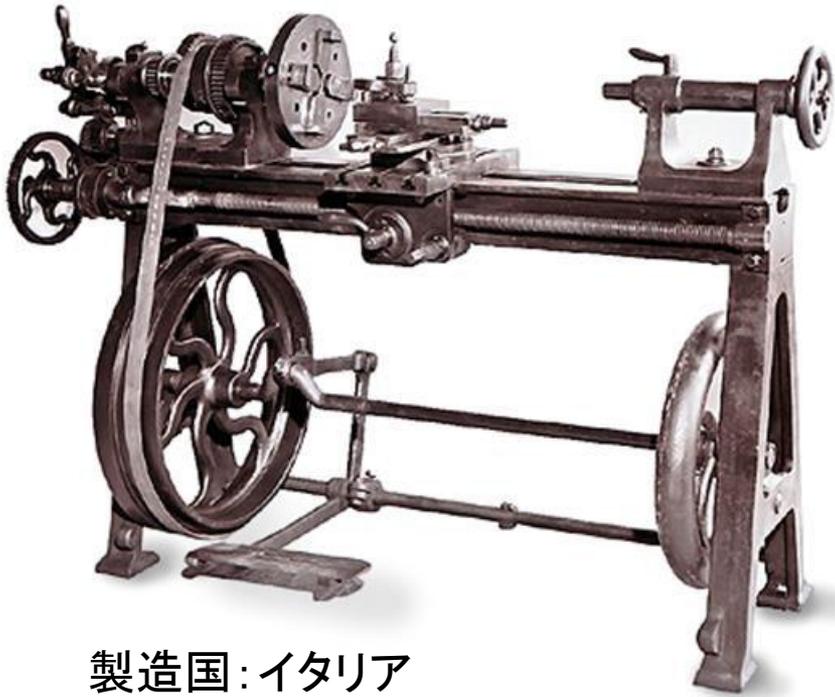


安保彌市郎の木地寸法帳 元治元年子七月(1864)



盛岡における一人挽きの始まり

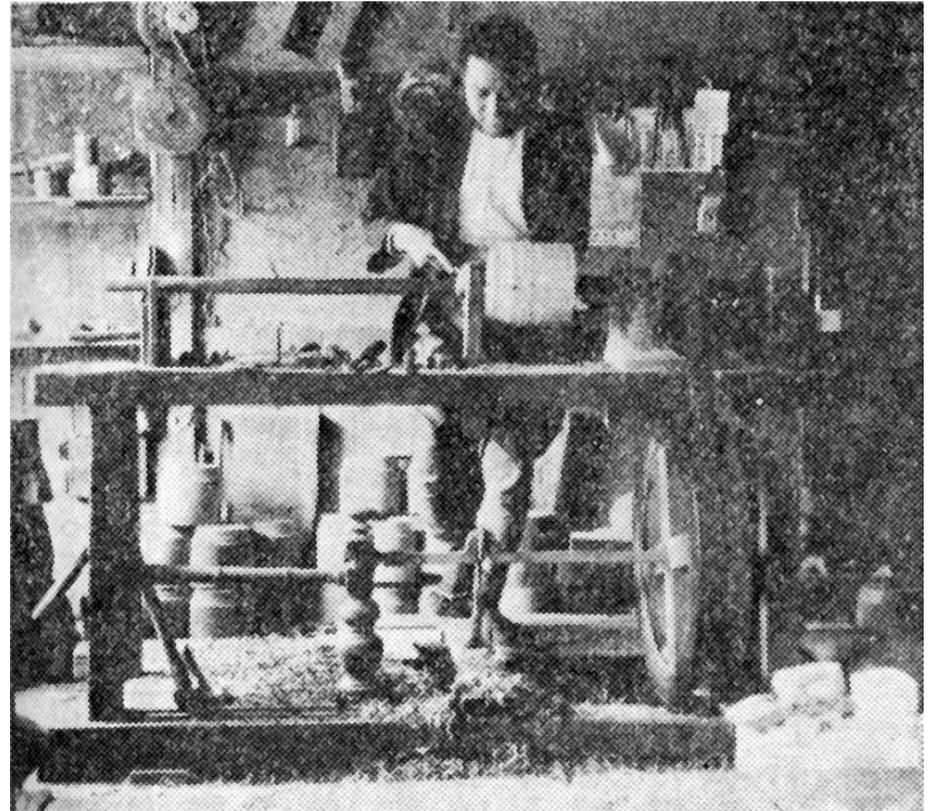
明治23年に日本鉄道は盛岡まで開通した。その直後に松田清次郎と煤孫茂吉は、盛岡車両修繕工場で、ハズミ車の付いたミシン式の西洋足踏み旋盤を見た。それをもとに二人で工夫してハズミ車応用足踏み旋盤を開発した。



製造国: イタリア

製造時期: 1815年

[三共製作所 シンツールコレクション](#)



⇒ [松田弘次の実演](#)

[はずみ車応用足踏みロクロ](#)

盛岡のキナキナ

安保・松田・煤孫一家のキナキナ



盛岡のキナキナの流れをくむもの



宮古 坂下権太郎
松田清次郎の弟子



花巻 大沼俊春
松田徳太郎型



花巻 佐藤誠
檳榔樹の実の頭

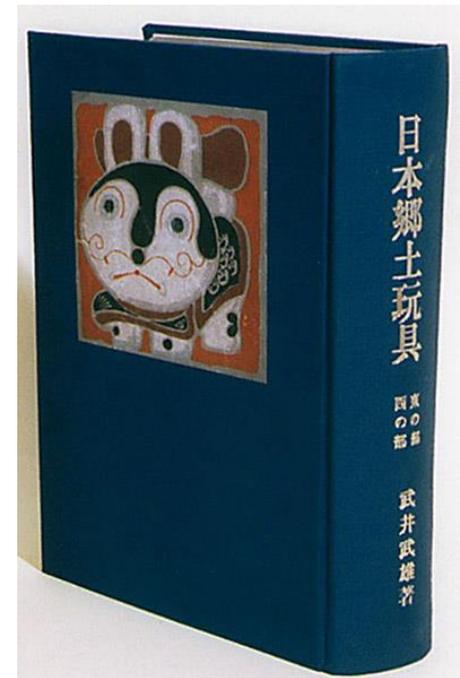
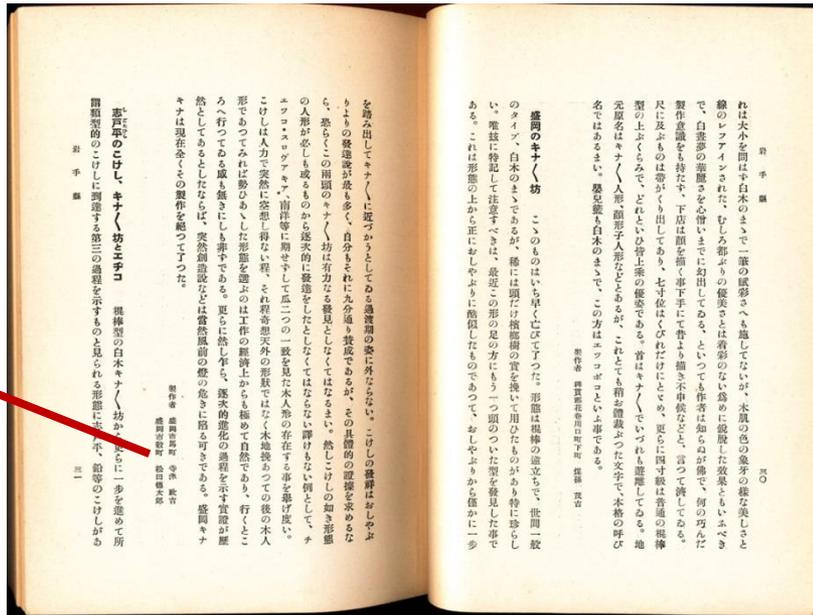
寺沢政吉

日本郷土玩具（昭和5年）で「盛岡のキナキナ坊」の作者として紹介。
 作品は未確認。昭和12年東京こけし会版こけし番付に前頭で掲載。
 明治18年3月20日盛岡で生れる。14歳より10年間、松田清次郎に師事。
 その後独立。昭和42年4月没、78歳。息子は「寺沢スキー製作所」を経営。

昭和44年の寺沢スキー店での調査ではそれ以上分ならず。

製作者

盛岡市馬町 寺澤 政吉
 盛岡市穀町 松田徳太郎



西田記念館蔵



寺沢政吉 4寸8分

寺沢精一郎 3寸5分
(省一郎か?)

寺沢七郎 3寸2分 3寸8分
(平成5年頃)

〈こけし辞典〉では、寺沢政吉の作品は未確認とされたが、西田峯吉蔵品中に、息子精一郎作とともに存在することが分かった。ただし、長男は省一郎であり、精一郎という子供はいないので、省一郎の聞き違いかもしれない。七郎は政吉の6人の子供の末子。

寺沢七郎

昭和3年6月15日、盛岡の木地業寺沢政吉の6番目の子供（末子）として生れる。

昭和20年戦争よりもどったのち、父政吉とともに木工業に従事する。

スキーが好きで、自らスキー板の製作を始め、昭和25年より寺沢スキー製作所を開業する。

大型スポーツ店進出により価格競争が激しくなったのでスキーの製作を断念し、昭和54年より、木工業に戻る。漆器を主に小物製作を始める。現在86歳であるが現役で、盛岡市茶畑の寺沢製作所で、桑の茶入れなど茶道具の製作を続けている。



寺沢七郎

きなく坊っこの由来

盛岡は、南部藩の城下町である。この城下町に幼児の歯ぐきを丈夫に強くするため桑の木で作ったおしゃぶりがあった。このおしゃぶりを木坊子、貴坊こ又は喜坊こと言ひ、その子の歯の健康と幸福を願つた。南部二代藩主、南部重直公(寛永六年一六二九年)先進地より技能者(職人)を召抱えた諸職人の内、挽物師(氏名不祥)あり。桑は、万病よけの名木であり、桑の木で作り首を動くように製作し、若君・姫君の誕生に献じたと伝えられ、藩内の上級武士の間で出産祝の添物として珍重され、後、一般民家でも、これを自分の子の出産に、又、出産祝に使われ、いつのまにか首がきなく動く所よりきなく坊っこと言われるようになった。又、きなく坊っこは、幼児の使つたあと、生年月日、氏名を書き、養子、嫁入りの折、両親が「へそのお」と共に愛情をきなく坊っこに託したものである。

この形は、こけし愛好家の間では、南部系のこけしとして分類しているが、こけしとは違つた用途で色を使用せず、木材をそのまま生かして使用し、曲線でその用を十分果たしている。

お子様の誕生の折は、幼児の健康を願つて使われたきなきな坊こを記念とし、又、旅のよい思い出として御愛用して頂きたいと思ひます

「長寿桑の木

南部 木目のふる里」

カ お気付の点がございましたら
左記までご連絡下さい

盛岡市茶畑二丁目十五・二十六

佛寺沢スキー製作所

電話二二一五四八五

盛岡で作られたキナキナ

吉田木工所：木地の系譜は不明



〈東北の玩具〉(仙臺鐵道局編纂)(初版：昭和13年、再版：昭和14年)の巻末には「こけし這子製作地一覧表」が載っている。この一覧表には、盛岡の項の製作者として安保木地工場に加えて、吉田木工所の名がある。その住所を盛岡市本町とした上で、「キナキナ坊の製作者なるが、目下製作中止の趣、近く再製作に着手するという」という記事が添えられている。

橘文策の〈こけしざんまい〉「こけし紀行 盛岡」には、橘がこけしを求めて盛岡市内を歩き、本町の吉田時計店でおしゃぶりを購入したという記載がある。時計店の主人が奥から持ち出した晒しの風呂敷の中に、おしゃぶりが千個以上あったとある。寸法違いで10本ほど購入したが、胴に口クロ線が入ったのを一つ見つけたとも書かれている。(昭和7年)

この吉田時計店が吉田木工所のことであるのかは確かではないが、住所が同じ本町であるからおそらく同じであろう。

鎌田千代松

煤孫茂吉のもう一つの源流

鎌田甚兵衛・ヨシの長男として万延元年五月二日に臺温泉で生まれた。千代吉、千代治とする文献もあるが戸籍名は千代松。千代松の家は代々甚兵衛を名乗り、千代松も家督相続後は甚兵衛を襲名した。

父甚兵衛は羽黒の修験道を学んで「臺の天狗」と呼ばれ、同じ修験道仲間の「清六天狗」とも仲が良かった。鎌田千代松は慶応元年六歳のときに、この清六天狗について諸国を遍歴し、明治十二年二十歳になってようやく臺に戻った。遍歴時代に清六について修験道を学んだが、鍛冶屋、石工、木地挽きの技術も身につけたといわれる。

仙台人名大辞書

菊田定郷編

セーロクテング 【清六天狗】 健脚家。一ノ關の飛脚にて身體輕捷比なし、一ノ關仙臺間相距る二十五里、清六一日にて往復するを常とす、其の道路を行くや飛ぶが如く、里人依て清六天狗と云ふ。(千早多門氏稿)

天狗の遺物「清六天狗の下駄」



岩手県遠野市に伝わる天狗の遺物
遠野市立博物館所蔵

2006年 上野の国立科学博物館で
開催された「化け物文化誌展」で
展示された。

●第99段（遠野物語拾遺） 清六天狗のこと

遠野の町の某という家には、天狗の衣という物を伝えている。袖の小さな襦袢のようなもので、品は薄くさらさらとして寒冷紗に似ている。袖には十六弁の菊の綾を織り、胴には瓢箪形の中に同じく菊の紋がある。色は青色であった。昔この家の主人と懇意にしていた**清六天狗**という者の着用であったという。

清六天狗は伝うるところによれば、花巻あたりの人であったそうで、おれは物の王だと常にいっていた。早池峰山などに登るにも、いつでも人の後から行って、頂上に着いて見ると知らぬ間にすでに先へ来ている。そうしてお前たちはどうしてこんなに遅かったかと言って笑ったそうである。

酒が好きで常に小さな瓢箪を持ちあるき、それにいくらでも酒を量り入れて少しも溢れなかった。酒代によく錆びた小銭をもって払っていたという。この家にはまた天狗の衣の他に、**下駄**をもらって宝物としていた。右の**清六天狗**の末孫という者が、今も花巻の近村に住んで、人はこれを天狗の家と呼んでいる。

この家の娘が近い頃女郎になって、遠野の某屋に住み込んでいたことがある。この女は夜分いかに嚴重に戸締りをしておいても、どこからか出て行って町をあるきまわり、または人の家の林檎園にはいって、果物を採って食べるのを楽しみにしていたが、今は一ノ関の方へ行って住んでいるという話である。



父甚兵衛発願であるが、石を彫ったのは
鎌田千代松であるといわれている。
このとき千代松34歳。

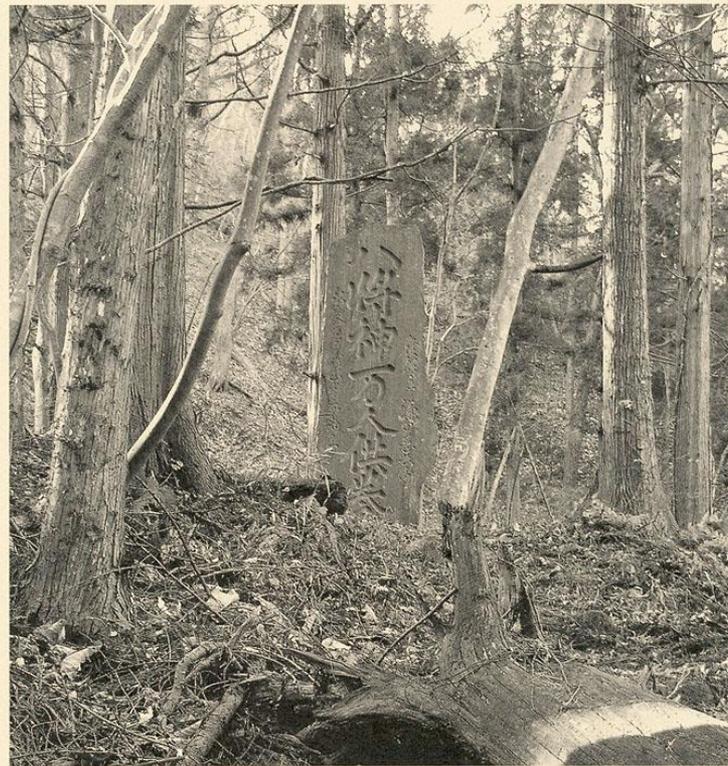
臺に戻った千代治は、修験道による祈禱治療なども頼まれると行っていたらしく、特に傷寒（腸チフスの類か）には効力を発揮したらしい。修験道は陰陽道とも関係が深く五行と方位を司どる八將神（太歳神・大將軍・大陰神・歳刑神・歳破神・歳殺神・黄幡神・豹尾神）を祀った。
今日でも花巻温泉から臺温泉に向かうと不動の滝の近くに鎌田甚兵衛発願の「八將神万人供養」の大きな石碑が建っている（明治26年の建立）。



甚兵衛天狗像(佐々木いづみ画)

八将神万人供養塔建立120周年記念

鎌田甚兵衛と八将神万人供養塔



編集・発行 八将神講別当 佐々木仁
平成25年11月8日発行

初代甚兵衛は北湯口天王社の
別當堂（べっとうど）から
安永年間に臺温泉に隠棲した。
三代目甚兵衛から鎌田屋旅館開業。
臺温泉薬師堂社主。「臺の天狗」
四代目が鎌田千代松。



初代 甚兵衛
文化12年9月10日(1815)歿
義興道忠信士 湯沢 甚兵衛
二代目甚兵衛
文久2年午8月8日(1862)歿
徹照軒天山道暁清居士 湯沢 甚兵衛事
三代目甚兵衛
明治29年3月18日(1896)68才歿
明等軒聲外密音清居士 台温泉 鎌田甚兵衛
四代目
大正10年12月28日(1921)63才歿
義正軒靖節徹俊清居士 台温泉 鎌田千代松



八将神
 民間伝承では牛頭天王の八王子といわれ、その母は牛頭天王の妃で娑竭羅龍王（しゃかつらりゅうおう）の娘、頗梨采女（はりさいじょ）とされる。



宝永7年（1710）の
 八将神掛軸



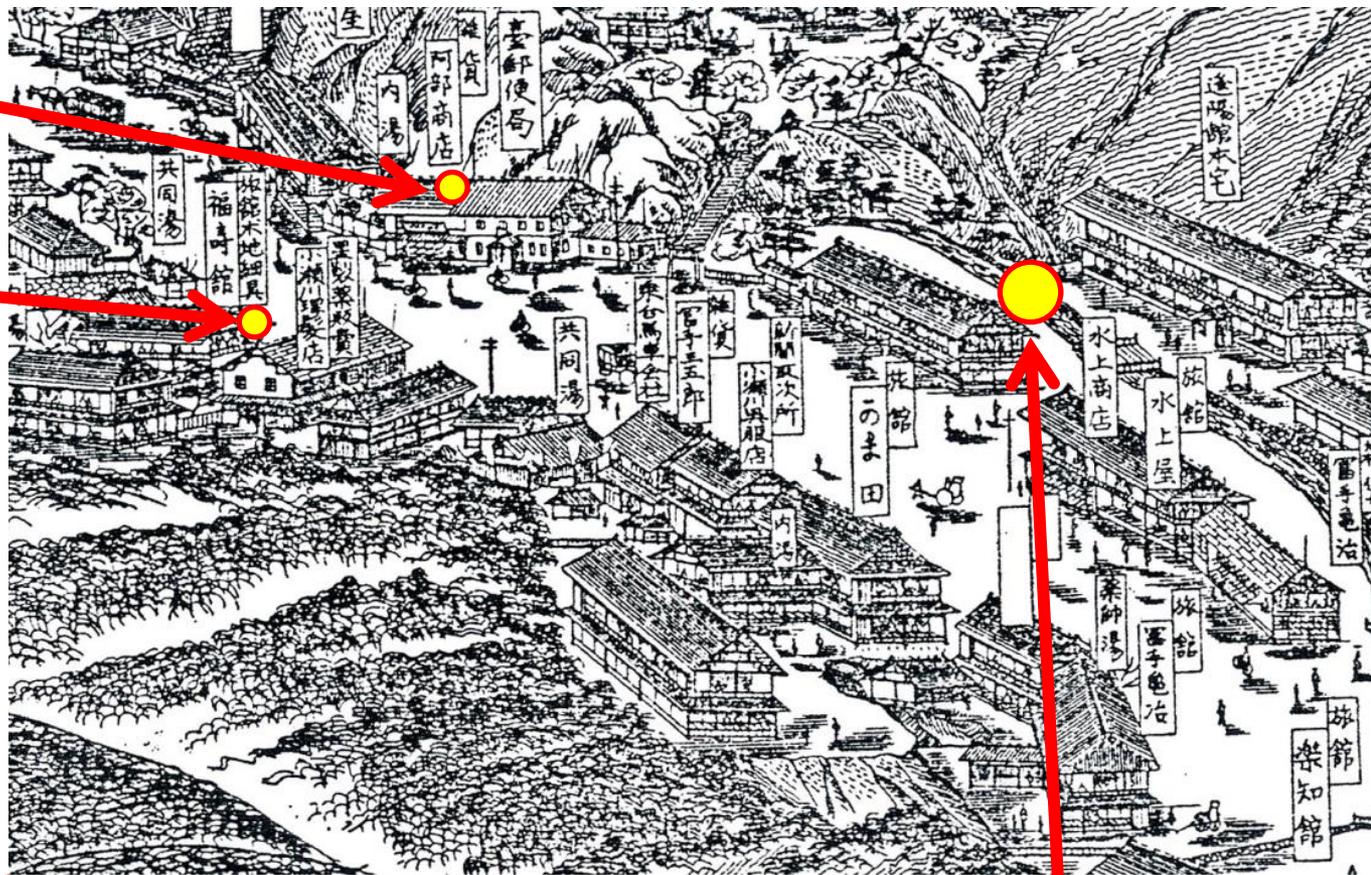
臺に戻った千代治は松田旅館裏手の臺川の上に木の板を渡して作った木地小屋で、細君に綱を取らせて、二人挽き、立木の小物を専門に挽いていた。

盆・茶櫃といった大物塗り下ではなく、温泉宿で鬻ぐ小物を挽いていたのであろう。

橘文策氏の聞き書きによれば「こけし、コップ作りは巧妙で、県令石井省一郎から賞状を得た（教室だより、五十号）」という。

阿部商店

藤原政五郎が
木地を挽いて
いた福寿館



鎌田千代松が川の上に板を渡して木地を挽いていたのは、この辺り（現 松田屋旅館の裏手）

大正5年ころの臺温泉地図

こけし作者 鎌田千代松

西田峯吉氏がまとめた先人の聞き書きに}よる千代松のこけしは次のようなものであったという。「首の回るもので、顔を描き、胴には紅葉を描いた。帯のあるキナキナも作った。用材はさるすべりやこさんばらを用いた。木口は鋸による切り離し。」

煤孫茂吉の作る帯のあるキナキナは千代松からの伝承。

ただ、千代松はキナキナとこけしを区別して作っていたらしい。

こけしは面描もあり、胴に紅葉も描いたらしい。

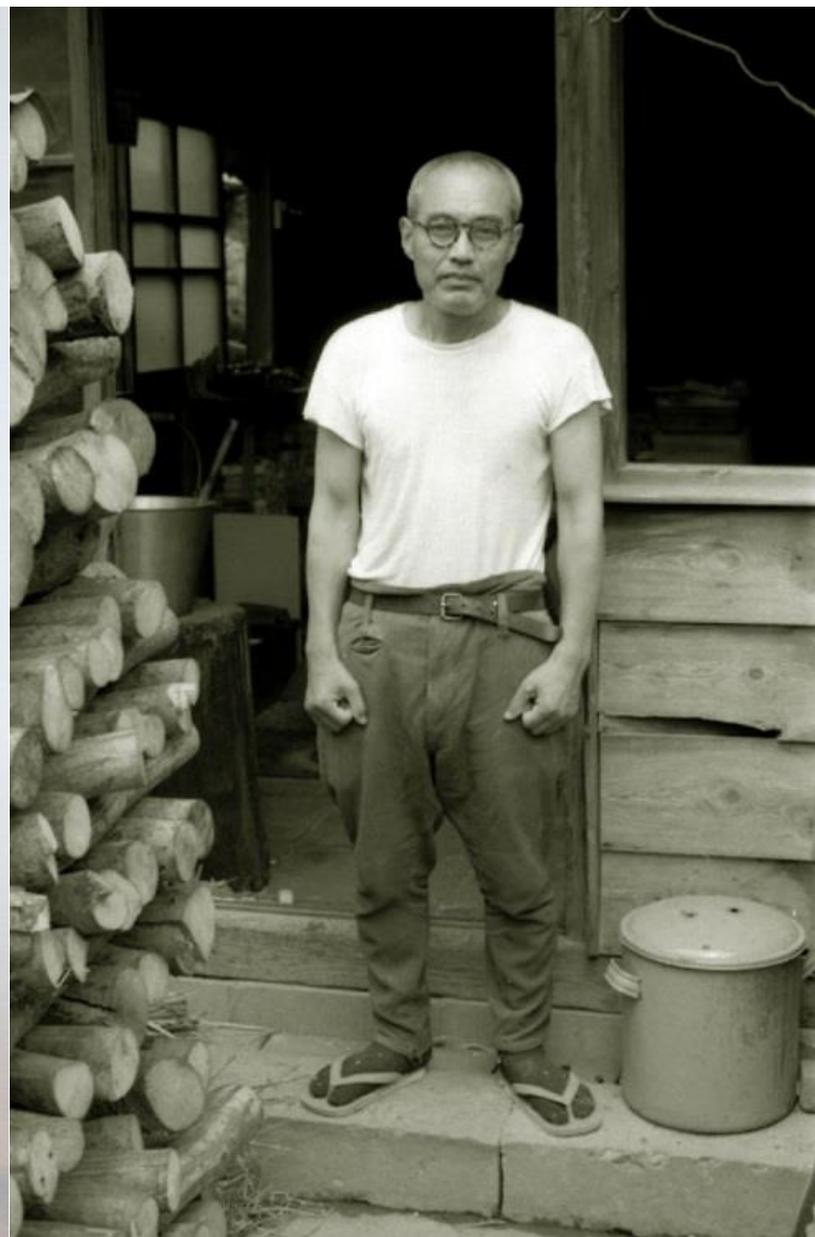
茂吉はこけしを学ぶ間もなく千代松のもとを去り、盛岡の松田清次郎のもとへ移った。

煤孫茂吉

深沢コレクション



煤孫実太郎



鎌田千代松のこけし

そめや旅館主人の記憶による千代松

赤の口ク口線

顔の描彩なし



阿部商店老女の記憶による千代松



楓の胴模様のほか
にこのような
花模様も描いた





臺の天狗

臺

清六天狗

木地山

一ノ関

鬼首

築館

鳴子

羽黒山

明治初年から十年頃
一ノ関と羽黒山間を
行き来していた。
木地を学んだのは、
一ノ関あるいは築館、
鳴子・鬼首。

鎌田千代松の可能性のあるこけし



米浪庄弋旧蔵 臺の古こけし



形態から一ノ関宮本一家の古作と言われてきたが。頭はクククラと動く南部の形式。発見場所は不明。
(石井真之助旧蔵)



昭和42年臺温泉の土産物屋
のガラスケースの中に
転がっていたキナキナ。
一本20円だった。



キナキナの世界は
思いの外 奥が深い

深沢コレクション
作者不詳キナキナ
4寸 3寸8分

次回予告

キナキナ制作にかかわる南部地方の木地師のグループ

① 安保一家とその弟子筋

元禄年間に美濃より秋田県鹿角郡安保へ移動して木地業を営み、後に浄法寺の荒屋地区に移った。

享保年間に南部藩より二人扶持を与えられてお抱え木地師となり、盛岡に移住した。

② 志戸平の佐々木一家

佐々木家は代々花巻城の家老職を務めていたが、南部利直候(1576~1632)が慶長18年に花巻城に入城したあと意見が対立して二子城へまわされた。これを快しとせず、城を去って志戸平に移った。その初代覚平より志戸平で木地を始めた。

③ 傘口クロ師

花巻は京都、岐阜、金沢などの並んで、江戸末期から明治にかけて和傘の産地として知られた。傘の口クロを挽く工人も多くいた。

④ 他産地からの影響や県の産業振興政策によるこけし

- a. 鳴子から来たこけし工人とその影響
- b. 青根で学んだ照井音治
- c. 工業試験場の技師の図案
- d. 業者によるこけし

佐々木一家の移動経路

